

平成 24 年 9 月 12 日
アンジェス MG 株式会社

肝細胞増殖因子(HGF)の新しい抗炎症メカニズムを解明
—大阪大学の研究グループが
米国学会誌 Arteriosclerosis, Thrombosis & Vascular Biology に論文発表—

当社と協力関係にある大阪大学医学部の森下教授らの研究グループは、HGF がリポポリサッカライド(LPS)によって誘導される全身性炎症反応症候群 (Systemic Inflammatory Response Syndrome, SIRS) に対して有効であることと、その作用機序について初めて解明しました。今回、米国の学会誌、Arteriosclerosis, Thrombosis & Vascular Biology (online publish August 30 2012) にて、本成果が発表されましたので、その内容についてご報告いたします。

LPS は細菌やグラム陰性菌の細胞膜の構成成分で、細菌感染がおこると人体に対して発熱、低血圧、炎症、ショック、血管浮腫や多臓器障害を引き起こす原因とされています。特に、敗血症ショックは集中治療センターにおいては死亡の原因となり、40-70%の死亡リスクがありますが、まだ有効な治療法が確立していないのが現状です。そのため本疾患の病態生理学的および分子メカニズム解析による新たな治療法の開発が切望されております。

LPS は血管平滑筋細胞の内皮細胞増殖因子受容体(EGFR)を通して、血管細胞接着因子(vascular cell adhesion molecule-1, VCAM-1)の発現や活性酸素を発生させ、炎症を惹起することが知られていますが、今回、森下教授らの研究グループは、HGFによりEGFRの分解を介したVCAM-1発現抑制と活性酸素の生産抑制を促し、LPSで誘導される炎症を抑制することを解明しました。このことは改めてHGFが炎症性疾患に対する有効を示すものです。

当社は、コラテジェン(HGF 遺伝子医薬)の閉塞性動脈硬化症等に対する治療法の開発を進めており、HGFの血管新生作用による根本療法を目指しております。一方、閉塞性動脈硬化症は細菌感染症を併発しやすく、細菌感染により死亡に至ることも少なくありません。この度の研究成果はHGFの新しい抗炎症メカニズムを示すものであり、HGFによる新たな有用性を示唆する重要な知見であります。

本件による本年度業績への影響はありません。

以上

お問い合わせ先 アンジェス MG株式会社 社長室 広報グループ TEL: 03-5730-2480
